

コミュニティ・シンボル論①

コミュニティ・シンボルのタイプと機能

On Community Symbols I : Types of Community Symbols and their Functions

水野博介*

Hirosuke MIZUNO

<目次>

- 1 はじめに：「コミュニティ・シンボル論」とは何か
 - 2 コミュニティ・シンボルの諸タイプ
 - 1) コミュニティ・シンボルのシニフィアン（記号形式）
 - ①視覚的なシニフィアン
 - ②聴覚的なシニフィアン
 - ③嗅覚的なシニフィアン
 - ④味覚的なシニフィアン
 - ⑤触覚的なシニフィアン
 - 2) コミュニティ・シンボルのシニフィエ（記号内容）
 - A 歴史的事実や存在
 - B 想像上・架空の存在
 - C 未確認の事実や存在
 - 3 コミュニティ・シンボルの機能
 - 1) コミュニティの住民にとっての「誇り」あるいは「アイデンティティ」の源泉
 - 2) コミュニティの「歴史」「記録」
 - 3) コミュニティの「観光資源」
 - 4 結語
- <文献>
<Wikipedia>

1 はじめに：「コミュニティ・シンボル論」とは何か

筆者（水野）は 10 年ほど前から「都市メディア論」というものを構想し、そのなかでも特にさまざまな「シンボル」の存在に着目し、それらが都市においてもつ意味や機能を考察してきた（例えば、水野 2015）。つまり「都市シンボル」の考察である。しかしながら、この「都市シンボル」というネーミングは、大都市の場合、いささか大まかすぎるものがしばしばある。例えば、東京を考える場合、「東京タワー」「スカイツリー」「皇居」や「国会議事堂」「浅草寺」などは「東京」という都市のシンボルとも言えるが、同時に「日本」全体のシンボルとも言える。東京だけでなく、日本全体を代表してしまうのだ。もっと東京におけるローカルなシンボルを考えようとすると、例えば「忠犬ハチ公像」（渋谷区）だとか、江戸時代に植えられ庶民の花見が始まった場所と言える「飛鳥山（の桜）」（北区）、あるいは現代の商店街の代表の一つである「戸越銀座」（品川区）などがその候補になりうるであろう。しかしながら、これらは逆にローカルすぎて、広大な「東京」を代表するとなると、いささかその身のたけに余るといった感じになりそうである。

* みずの・ひろすけ
埼玉大学名誉教授，メディア論

他方、地方都市の場合でも、「都市シンボル」という言葉は少しく違和感を感じさせる場合がある。例えば、「アニメの聖地巡礼」といった比較的新しいシンボルの場合、アニメに描かれたさまざまな建造物（モニュメントを含む）や風景が、その土地のシンボルと見なしてよい場合があるのだが、「都市」と言うとき“都会”を連想してしまい、田園風景などを「都市シンボル」と言うのはいささか抵抗を感じる。また、アニメの聖地巡礼の最初の事例と目される現・久喜市の「鷲宮神社」は、神社であることも「都市」にはややふさわしくない感じもするが（ただし、日本のあらゆる場所に神社は存在してはいる）、それ以上にもともとは「鷲宮町」のシンボルであったものが、合併されたからと言って、新たに「久喜市」のシンボルだと言うのも、少々気がひける感じになる。久喜市に合併されたが、やはり「鷲宮」のシンボルと言いたい気持ちがある（これは、筆者の気持ちであり、同時におそらくは地元の多くの住民の気持ちでもあろう）。

以上のような考慮の末、これまでの「都市シンボル」についての考察を「コミュニティ・シンボル」という新たな枠組みのなかで再構成することにした。ただし、必要に応じて「都市シンボル」という言葉も使うことがあるかもしれない。

「コミュニティ・シンボル」という枠組みを設定すると、さまざまな規模の「都市」にある、さまざまな範囲や地理的特徴をもつ地域における「シンボル」を考察することができる。また、いわゆる「まちづくり」と関連づけるためにも、「コミュニティ」＝「まち」レベルで「シンボル」を考察した方がよいという考えに至ったのである。なぜなら、現実において「まちづくり」は、都市全体というよりは、ある一定の範囲＝「コミュニティ」を単位として進められること

が多いのではないかと考えるからである。

問題は、最近、「コミュニティ」という言葉が用いられる範囲がかなり広がっており、例えば、ネット上においてもバーチャルなコミュニティが存在しているので、より正確を期すなら「地域コミュニティ」の方が適切かもしれないということである。しかしながら、本稿で言う「コミュニティ・シンボル論」は、現実には失われ、ネットのなかにしかないコミュニティや、架空のコミュニティも範囲に含める可能性もあるので、とりあえずは「コミュニティ」という言葉のみを冠したシンボル論として提示していきたいと思う。

2 コミュニティ・シンボルの諸タイプ

コミュニティは、人びとが存在し、そこで生活し活動する場であるから、「コミュニティ・シンボル」にも、さまざまなものがある。

これまで筆者が「都市シンボル」について関心をもってきて、それらをいくつかの種類に分類したのが、以下のものであった

（水野，2015）。

- ①ランドマーク
- ②都市の起源
- ③都市名・市章・ニックネーム
- ④祭り・イベント
- ⑤景観
- ⑥有名人
- ⑦架空の存在
- ⑧映画やドラマなどのロケーション
- ⑨ゆるキャラ
- ⑩B級グルメ
- ⑪アニメの聖地
- ⑫ローカル（ご当地）・アイドル
- ⑬ローカル（ご当地）・ヒーロー
- ⑭ご当地の風景や都市景観を織り込んだ映

画・テレビドラマあるいはご当地ソング等
これらの分類は、具体的なイメージを抱きやす
いという点では有効であるが、分析的なもの
ではなく、恣意的な分類の印象があった。本稿
では、一旦、これらの分類は放棄し（今後の稿
で、改めて以下の考察との関連づけを考える）、
理論的に、より基礎的な考察を試みる。

ここでのテーマは「シンボル」であるから、
まず「シニフィアン（記号形式＝意味するもの）」
と「シニフィエ（記号内容＝意味されるもの）」
を区別することができる。この2つの側面から、
コミュニティ・シンボルを分類していく。

1) コミュニティ・シンボルの シニフィアン（記号形式）

コミュニティ・シンボルの「シニフィアン（記
号形式）」とは、シンボルがどのような形で五感
に捉えうるかということである。具体的な造形
か、人か、言葉や紋章かなどといったことであ
る。「五感」に捉えうるという観点から考えると、
①姿形のある「視覚」的なシンボルが圧倒的に
多いと思われるが、②言葉というシンボル（市
町村名・地名）や例えば法隆寺の鐘の音のよう
なもの、さらには「音楽（歌や曲）」もシンボル
でありうるから、「聴覚」的なシンボルも比較的
多いであろう。また、③匂いのような「嗅覚」
的なものでさえもシンボルになりうる。例えば、
温泉地の「硫黄の匂い」や醤油の産地における
「醤油の香り」などは、立派なシンボルであり
うる。④「味（覚）」については、各地における
名産物の食物やB級グルメ的なものはシンボル
でありうるから、これも結構多いとも言えよう。
ただ、⑤「触覚」的なシンボルというものはあ
まり考えられない。例えば、樹木や家々の壁の
肌触り或は風や波などがシンボルになりうるだ
ろうか？少なくとも視覚障害者にとっては、触

覚的なシンボルは重要なものではあろう。

①視覚的なシニフィアン

「視覚」的なシニフィアンは非常に多様なも
のがあるが、分類すると、

- 1 風景のような自然物
- 2 夜景や街並みのような人工的風景
（ただし、「里山」や「棚田」のような自然と
人工とが混ざり合った風景もある）
- 3 モニュメントや建造物のような物理的な
造形
- 4 現存する人物や動物
- 5 活動あるいは一時的な（瞬間的に出現す
る）物理的存在（例：祭り・花火）
- 6 2次元画像（絵画・セル画など）
- 7 2次元動画（ビデオ・フィルムなど）
- 8 3次元画像（ホログラムなど）
- 9 3次元動画（プロジェクションマッピング
など）

②聴覚的なシニフィアン

- 1 自然音（自然現象・動物の鳴き声など）
- 2 人工的な音（例：鐘の音・工場の音）
- 3 自然と人工的なものと触れ合う音
（例えば、風鈴の音）
- 4 言葉
- 5 音楽

③嗅覚的なシニフィアン

- 1 自然の匂い（例：温泉地の硫黄の匂い）
- 2 人工的な匂い（例：醤油の産地の醤油の匂
い）

④味覚的なシニフィアン

- 1 食べ物（例：B級グルメなど地元特有の味）
- 2 飲み物（例：地ビールなど地元特有の味）

⑤触覚的なシニフィアン

- 1 能動的に触れることのできるもの (例: 樹木や壁の肌触り)
- 2 受動的に触れることのできるもの (例: 風や波)

2) コミュニティ・シンボルのシニフィエ (記号内容)

コミュニティ・シンボルのさまざまなシニフィアン (記号形式) があるのに対応して、それらが意味するシニフィエ (記号内容) も非常に多様である。

コミュニティ・シンボルは、各コミュニティの何を意味しているのであろうか? 明快な場合もあれば、意外に明快でない場合もある。ローマ市を造ったとされる「狼の乳を飲むロムルスとレムス (カピトリヌスの雌狼)」の銅像は、都市の生みの親となった双子の兄弟 (とその育ての親である狼) をかたどっているから、意味は明快である。それに対して、有名なパリのエッフェル塔は、1889年のパリ万博のシンボルではあったが、コミュニティに対する意味は明快ではなく、むしろ醜い建造物として多くの有名人たちから建設反対を叫ばれたほどである。ロラン・バルトも、この塔が本来何の意義も持たないことを論じている (バルト, 1997)。ただ、できあがってみると、20年という期限つきで壊す予定だったのが、なぜか壊されもせず、むしろパリひいてはフランスのシンボルとなってしまう、今に至っている。このように、まさに「シンボル」としての意味しかないシンボルもあり、シニフィエを示すことは意外に難しい場合があるのだ。長くそこに存在しているという事実が、「シンボル」としての必要条件となっているのだ。東京の渋谷駅前にある有名な「忠犬ハチ公」の銅像も、本来は、主人に忠実な犬として、亡

くなる前から有名で銅像にされてしまったわけで、軍国時代の模範となるような存在としての意味はあったが、コミュニティにとっての意味は特になかった (地元の犬には違いなかったが)。ある場所に置かれていたことで、その場所を象徴する存在に転化していったわけだ。

以下では、一応、コミュニティ・シンボルが持ちうるシニフィエ (記号内容) を分類してみる。この場合、シニフィエは非常に多岐にわたると予期されるが、なるべく数多く見られる典型的なものを挙げていきたい。また、シニフィエは、具体的な指示的意味をもつ場合と、そこから派生した抽象的な意味をもつ場合とがあるが、派生的な意味は、まさに二次的に生じるものであり、個別的で分類がしにくい。そのときどきの事情で、派生的な意味は変動するかもしれないからである。それ故、以下では指示的な意味をもつばらみていく。

なお、ここでは、わかりやすいシンボルの例として、特に「銅像」について事例を収集・分類した本 (木下監修, 2011) を導きのモデルとするが、それ以外のシンボルについても、適宜含めていく。「銅像」は、前項のシンボルのシニフィアンとしては、①の3に分類される。つまり、視覚的なモニュメントである。

A 歴史的事実や存在

過去に確かに実在したモノ・ヒト・コトを意味する場合である。つまり、「シンボル」のシニフィアン (記号形式) である存在のシニフィエ (記号内容) が、歴史的な実在ということである。より具体的には、

- a 過去から現在に至って存在してきたモノ (再建・復元を含む)
- b 過去に実在した人物 (や動物)
- c 過去に実在したモノ (の痕跡や指標)

d 歴史的事件（の痕跡や証拠）

具体的な例を挙げれば、a の過去から現在に至って存在してきたモノについては、例えば「原爆ドーム」（広島市）を挙げることができよう。この例の場合は、もともと産業奨励館という建造物であったが、たまたま史上初の原子爆弾がその頭上に落とされたことから、d 歴史的事件の痕跡・証拠にもなった。ただし、その事実から、コミュニティのシンボルというよりは、日本や人類にとってのシンボルの意味を色濃く持っている。

同様に、現在、あちこちで、残すべきか否かが問題になっている東日本大震災の大津波の「震災遺構」は、ここに分類される例となろう。

b については、典型的には「銅像」を挙げることができよう。例えば、東京台東区にある上野公園内の「西郷隆盛像」は、犬を連れた銅像になっていて、東京（あるいは台東区や上野公園）のシンボルでもあり、また幕末から明治という混沌とした時代を彷彿とさせるシンボルでもありうる。

B 想像上・架空の存在

伝説・伝統あるいはフィクションなどに基盤を置く存在。そのモノ・ヒト・コトは、伝承や出版等によって、少なくとも言語的には存在するが、視覚的には存在したりしなかったりする。例えば、「神」「河童」「桃太郎」は、銅像や絵画などになりうる。あるいは、岡山市に現存する「桃太郎スタジアム」のように、近代的な建造物に、架空の人物の名が冠せられる例もある。

映画の登場人物がコミュニティのシンボルと化す事例としては、「寅さんシリーズ」として知られる映画『男はつらいよ』（計 48 作）の主人公である車寅次郎がいる。これは、俳優の渥美清が演じた人物であるが、東京都葛飾区柴又と

いう実在の場所が舞台となり、渥美自身が寅さんになり切って生活していた（この役を演じて以来、渥美個人としての姿を人前にさらさなかったと言われる）こともあって、寅さんはコミュニティにおいて、ほとんど実在していたという錯覚を与える。京成線の柴又駅前には、現在では渥美清が演じたままの姿の車寅次郎の銅像が立っている。

イギリスで有名なシャーロック・ホームズに関しては、小説のなかでホームズが住んでいるとされる建物が事後的に特定され、1990 年に博物館となり、ロンドン観光のシンボルになっている（ベーカー街 221B, wikipedia）。同じくイギリスを舞台とする小説および映画である『ハリーポッター』シリーズに出てくる「キングズ・クロス駅」（実在）にあるとされる「9 と 3 / 4 番線」は、コミュニティのシンボルになりうるだろうか（やはり、ロンドン観光のシンボルにはなりうるか）？

C 未確認の事実や存在

実在したであろうが、実在の確たる証拠が不明なモノ・ヒト・コトとしての存在である。

この例としては、「邪馬台国」関連のものを挙げることができよう。邪馬台国は、現代的な意味での国家ではなく、“都市” 国家とここでは見なす（当時、その周辺に、他にも多数の都市国家があったと思われるが、それらのなかでも中心的な都市であった）。その所在地がどこであったか未だに確定していない。しかし、呪術的リーダーであったとされる卑弥呼の墓の可能性が指摘される箸墓古墳や銅鏡などの関連事物は、そのシンボルでありうる。

他に、例えば、スコットランドのネス湖一帯の地域のシンボルと言えば「ネッシー」であり、ここでの例としておく。もしその実在が証明されれば、A に分類されることになる。

3 コミュニティ・シンボルの機能

どのようなモノ・ヒト・コトが「コミュニティ・シンボル」となり、具体的にどのようなイメージを住民あるいはコミュニティを訪れる（可能性のある）人びとにもたらすかということは、コミュニティのまちづくりという点からも重要なことである。

具体的に、前節2で列挙したさまざまな事例は、コミュニティ（より一般的あるいは漠然と「場所」と言ってもよいかもしれない）のシンボルでありうるが、いくつかの機能を持つと考えられる。そこで、以下では、コミュニティ・シンボルがどのような機能を持ちうるかを確認しておきたい。

1) コミュニティの住民にとっての「誇り」あるいは「アイデンティティ」の源泉

あるコミュニティ・シンボルが指示するようなモノ・ヒト・コトが、そのコミュニティに存在する、あるいはかつて存在したことで、そのコミュニティの住人たちが、「私たちのモノ・ヒト・コト」として受容し、敬愛することで、それらを「誇り」として生きていくということがある。あるいは、「私は、そのようなモノ・ヒト・コトが存在するようなコミュニティに生まれ育った点で、他のコミュニティの住人たちとは違う」という思いを抱いて生きていくことがある。後者の場合には、自分が生育したコミュニティが、その人の自己認識の重要な一部になっており、自分の「アイデンティティ」を形成する。

例えば、ある人は、自らも音楽活動を行うが、その人は、有名なアーティストである加山雄三あるいは桑田佳祐を輩出した「茅ヶ崎(市)」で自分も生育したことを誇らしく思い、そのことを自分という人間の重要な要素と考える、とい

うことがありうる。

2) コミュニティの「歴史」「記録」

コミュニティ・シンボルは、それ自体「歴史」あるいは「記録」の機能を持ちうる。それらは、「遺産」とも言えるが、遺産にも正のものと負のものがある。負の遺産とは、例えば、東日本大震災の大津波の被害を具体的・可視的に示す事物がある。これらをコミュニティの「復興シンボル」とするかどうか、ということは大きな問題であり、住民の側においても、さまざまな考え方や思惑が錯綜し、意思統一が難しいようだ。

しかしながら、個別のコミュニティに関わる問題ではあるが、その地を訪れる（将来可能性のある）人びとの立場や、より大きな日本全体や人類という視野から見た場合には、やはり史上稀な大被害をもたらした大津波の被害を物語る事物は、貴重な「コミュニティ・シンボル」であり、「歴史資料」でもありうる。

3) コミュニティの「観光資源」

コミュニティ・シンボルは、実利的な面から見ても、当該コミュニティの「観光資源」になりうるが、すべてがそうなるとは限らない。集客が容易なものとそうでないものがありうる。2)で述べたような正の遺産と負の遺産もありうる。

しかしながら、まちづくりという問題においては、シンボルが観光資源として、どのように評価されるかは、極めて重要な側面であろう。具体的な事例は、稿を改めて見ていきたい。

4 結語

コミュニティ・シンボルの研究は、「まちづくり」のような契機があつてこそ、大きな意味を持ちうるであろう。今後は、具体的な事例を見ていきたい。

また、ここでは扱わなかったが、コミュニティ・シンボルの変遷あるいは歴史を時系列的に見ていくことや、日本において、近代的な「シンボル」という概念が西洋から導入される以前、つまり近世以前に、各地域を代表するものとして、どのようなモノ・ヒト・コトが、どのようなメディアに提示されていたか、また、現代において、具体的なコミュニティの分類を軸とするシンボルの配置の分析などは、今後の課題としておく。

<文 献>

水野博介 (2015) 「都市メディア論⑬『都市メディア論』執筆のための覚書き」『埼玉大学紀要 教養学部』第 50 巻第 2 号, 251-259 頁, 2015 年

ロラン・バルト『エッフェル塔』宗左近訳, ちくま学芸文庫, 筑摩書房, 1997 年

木下直之監修『ポケットヴィジュアル 東京の銅像を歩く』祥伝社, 2011 年

<Wikipedia>

ベーカー街 221b (2015 年 8 月 24 日参照)